波乱の時代を生き抜くために 今こそ必要な「ウメサオタダオ流」

自分で情報を判断し、先を読む力が切実に求められる現在。昨年死去した梅棹忠夫氏の生き方や思想には貴重なヒントがある。

小長谷（こながや） 有紀（ゆき）（国立民族学博物館教授）

国家の垣根が、どんどん低くなっている。並行して、個人が自分の能力を試される時代になっている。これからは、ビジネスなどの社会的な活動から生活にいたるまで、地球全体の世界各地のことをすばやく、正確に取り込む術が求められていくだろう。

東日本大震災が、まさにそうだった。大地震そのものは1次災害であり、2次災害のうちの最大のものが福島原発の事故である。さらに、それに関する報道のあり方は、3次災害とよんでもよいような状況だった。事実を伝えることよりも、もっぱら危機感をあおらないことを目的としていたからである。

たとえば、NHKのニュースは、東京都内各地で観測された1時間当たりの放射能の数値を図で示し、レントゲン1回分よりも小さく、「限りなくゼロに近い」という表現まで使って、人体に影響がないと強調した。「核戦争に反対する医師の会」は、報道機関が、原発の放射能汚染の危険を、レントゲン撮影の放射線量と比較するキャンペーンをしていることを看過できないとし、「ウラン、プルトニウム、セシウム、ヨードなどの放射性同位元素による原発汚染の危険性を無視することは容認できない」との声明を出した。マスメディアは、放射性物質にも毒性の違いがあることを無視し、かつ単位を言いくるめることによって、安全を騙（かた）ったと言っても過言ではない。

日本のマスメディアは第2次世界大戦時の「大本営発表」のようにふるまったわけだが、当時と異なるのは、世界各国の研究者やNGOがそれぞれのブログでさまざまな視点から誠実な情報を発信し、それを入手できることだ。自分で情報を取捨選択して判断する力や先を読む力が求められたのである。

日本を常に相対化していた

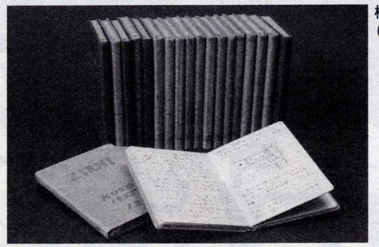
このように、地球規模で同時多発的に情報が発信され、私たちの力が試される時代には、国立民族学博物館の故・梅棹忠夫初代館長の思想を振り返りたい。千里万博公園（大阪府吹田市）にある民博で、3月10日から「ウメサオタダオ展」が開催されている。この特別展示のために、彼の残した膨大な資料を探検した私は、その思いを強くした。自分の人生や学問を、「有用性」という観点からとらえられることに対して梅棹氏自身は否定していたにもかかわらず、彼の残した資料は、未来を想像する力をわたしたち自身が養うために役立つ。

梅棹忠夫氏は、人びとがまだ世界中を歩いていなかった時代に、許可を得るための膨大な書類仕事をこなし、世界各地を探検した。その経験により、日本をつねに相対化することができ、未来を先取りし、斬新な思想を示すことができた。

たとえば、1954年、『アマチュア思想家宣言』で、カメラのように思想を使いこなそう、と提案した。57年には『文明の生態史観』を打ち出し、文明の複線的な展開という考え方を示した。当時としては画期的なことに、日本をヨーロッパと対等に位置づけたのだった。59年の『妻無用論』では、これからの「女たちは爆発する」と扇動し、その社会進出を鼓舞した。63年の『情報産業論』は、米国のダニエル・ベルやアルビン・トフラーよりずっと早く、工業化の次の段階、すなわちポスト近代のゆくえを提示した。

そして、69年になると、『知的生産の技術』で、市民のための情報生産活動を指南した。個人が世界をつかむための、地球の歩き方であった。それまでになかった「知的生産」という言葉を初めて使うと同時にみんなのものにしてみせた、という点で、まさにその本は予言の書であり、ベストセラーにもなった。

そんな先見性は、どのようにして得るのか。未来を想像する力は、どのようにしてはぐくむのか。



梅棹氏のフィールドノート（国立民族学博物館提供）

うめさおだただお　1920年京都市生まれ。京都大学理学部動物学科卒業。同大人文科学研究所教授、国立民族学博物館初代館長などを歴任。世界各地を探検し、独自の文明論を展開した。2010年7月死去。

梅棹忠夫氏によれば、「なんにもしらないのはよいことだ。自分の足であるき、自分の目でみて、その経験から、自由にかんがえを発展させることができるからだ」。知らないからといって卑下することはない。先入観や固定観念から自由でいることのほうがはるかに大切である。

「現地で、実物をみながら本をよむ。わたしはまえから、これはひじょうにいい勉強法だとおもっている。本にかいてあることは、よくあたまにはいるし、同時に自分の経験する事物の意味を、本でたしかめることができる」。

本や雑誌はあくまでも、自分のひらめきや発見について確かめるためのリファレンスにすぎない。まず大切なのはひらめきである。ひらめきは、そもそも誰にでも起こっているのだけれども、すぐ消えてしまうので、記録することが重要となる、というわけだ。

アイデアの源泉は「発見の手帳」

このような彼の考え方は、著書『日本探検』や『東南アジア紀行』あるいは『知的生産の技術』などに、これまで書かれてきたけれども、実際に、どのように彼自身が書きとめてきたのかは知られてこなかった。ウメサオタダオ展では、彼の使っていた道具類とともに、それらを使っておこなわれた知的生産の遺品が公開されている。遺品となる資料群は梅棹アーカイブズとよばれている。著作物およそ7000件、写真およそ3万5000点、フィールドノートおよそ130冊、スケッチおよそ100点、ファイルおよそ1万件、カードおよそ2000件であろうか。正確に数えることすら容易ではない。これらの膨大な資料のうち、写真およそ800点をふくむ1000点ほどが一般公開されている。

直筆のフィールドノートや日記、スケッチの数々における緻密さは、一見の価値がある。日常生活にあっては、大工仕事や友人の母からの伝言などまで、探検においては、鳥の声や風の音などまで、徹底してなにごとも書き付けた精神は、ぜひともご覧いただくほかはない。

ちなみに、先日、サハリンから来館された国立大学学長は、展示場を見て、掲げられている日本語をまったく読めないにもかかわらず、「ダ＝ヴィンチのような人ですね」と述べた。まさに、梅棹氏は若いころにダ＝ヴィンチをまねようとした、とみずから述べている。その偉大な精神に近づくために、「発見の手帳」をつけることにした。22歳のときの「発見の手帳」や、29歳のときの「発見の手帳のよみがえり」がこのたび梅棹アーカイブズから発見され、展示されている。

ローマ字タイピング原稿も注目される逸品である。55年、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加した梅棹氏は、アフガニスタンのモゴール族の村ジルニーに1カ月滞在したあと、カイバル峠からカルカッタまで、アメリカ人の運転するフォルクスワーゲンに乗せてもらい、助手席で膝の上にタイプライターを乗せ、ローマ字で旅行記をつけた。それが「文明の生態史観」を発想する源泉となった。東洋でもなく、西洋でもない、中洋という概念を聞き知り、イスラーム圏とヒンドゥー圏をまたいでゆくにつれ、社会的現象が移り変わるようすがタイピングされる。移動しながら撮影されたカラー写真は、砂漠でいかにも光量オーバーなものから、緑の濃い日本のようなものまで、色合いが変遷する。それらを並べて見ると自然環境の変化が分かる。そうした変化について、ためらうことなく記述してゆく方法は徹底した観察の到達点のように思われる。

また、元祖「知的生産の技術」者は、読者からの反響の手紙をすべて保存しており、こまめに返事も出して残している。50年代末からはじめた「日本探検」に関する資料は、膨大にあるにもかかわらず、あまり論文になっていないから、これを使えば、歴史学の博士論文を書くこともできるだろう。

梅棹忠夫氏の残した「ナマモノ」はすべて、ひらめきを逃さないウメサオ流、世界の見方、歩き方を示している。ひたすら書き付けることが、彼に何をもたらしたかを示している。スケッチや写真やことばを通じて、世界に接近する技を身に付けてほしい。